

二〇一九（令和一）年度 研究所報告

二〇一九（令和一）年度 研究所報告

1. 二〇一九（令和一）年度構成員

□東アジア学術総合研究所構成員

所長 山口 直孝
 特命教授 加藤 國安
 特命教授 野村 芳正
 兼任所員 陽明学研究センター長 田中 正樹
 同 日本漢学研究センター長 町 泉寿郎
 (同) 文学部教授 田中 正樹
 同 文学部教授 江藤 茂博
 同 文学部教授 磯 水絵
 同 文学部教授 原 由来恵

□東アジア学術総合研究所運営委員会構成員

所長 山口 直孝
 陽明学研究センター長 田中 正樹
 日本漢学研究センター長 町 泉寿郎
 文学部長・大学院文学研究科長 牧角 悦子
 国際政治経済学部長・大学院国際政治経済学研究科長

文学研究科選出委員
 国際政治経済学研究科選出委員
 文学部選出委員
 国際政治経済学部選出委員

中山 政義
 小山 聡子
 合六 強
 島田 泰子
 渡辺 和則

□東アジア学術総合研究所企画・編集委員会構成員

所長 山口 直孝
 兼任所員 陽明学研究センター長 田中 正樹
 同 日本漢学研究センター長 町 泉寿郎
 (同) 文学部教授 田中 正樹
 同 文学部教授 江藤 茂博
 同 文学部教授 磯 水絵
 同 文学部教授 原 由来恵
 文学研究科選出委員 小山 聡子
 国際政治経済学研究科選出委員 合六 強
 文学部選出委員 島田 泰子
 国際政治経済学部選出委員 渡辺 和則

□陽明学研究センター構成員

センター長 田中 正樹
 センター員 文学部特別招聘教授 市來津由彦
 同 文学部非常勤講師 中根 公雄
 研究協力員 東洋大学名誉教授 吉田 公平

同 活水女子大学名誉教授
同 横浜市立大学教授
同 秀明大学専任講師
助手 山路 裕

□日本漢学研究センター構成員

センター長 文学部教授 町 泉寿郎
センター員(文学芸術班) 文学部教授 磯 水絵
同 文学部教授 牧角 悦子
同 文学部教授 原 由来恵
同 文学部教授 五月女肇志
同 文学部教授 王 宝平
同(歴史思想班) 文学部教授 田中 正樹
同 文学部教授 小山 聡子
同 文学部教授 中川 桂
同 文学部教授 小方 伴子
同(漢学史班) 文学部教授 町 泉寿郎
研究協力員 公益財団法人東洋文庫 會谷 佳光
同 大東文化大学准教授 上地 宏一
同 文学部非常勤講師 清水 信子
同 文学部非常勤講師 川邊 雄大
助手 平崎 真右

2. 東アジア学術総合研究所運営委員会

第一回

日時 四月一八日(木) 一三時〇五分
場所 教授会会議室

議題

- ① 東アジア学術総合研究所 二〇一九年度特別事業費について
- ② 東アジア学術総合研究所 構成員及び事業概要について
- ③ 陽明学研究センター 構成員及び事業概要について
- ④ 日本漢学研究センター 構成員及び事業概要について
- ⑤ 研究員の選考について
- ⑥ 東アジア学術総合研究所 海外漢文講座講師派遣について(カ・フォスカリ大学・五月一三日・一四日)
- ⑦ 東アジア学術総合研究所 共同研究プロジェクト・SRF共催シンポジウムの開催について(本学・六月二二日・二三日)
- ⑧ 東アジア学術総合研究所 兼担所員(共同研究プロジェクト代表者)の学内公募について
- ⑨ 東アジア学術総合研究所 『東アジア学術総合研究所集刊』第五〇集の原稿募集について
- ⑩ 日本漢学研究センター 『日本漢文学研究』第一五号の原稿募集について
- ⑪ その他

第二回

日時 五月三〇日(木) 一二時三五分
場所 教授会会議室
議題 ① 東アジア学術総合研究所 兼担所員(共同研究プロジェクト研究代表者)の選考について

第三回

日時 六月一九日(水) 一四時一五分
場所 六〇二教室

- ② 東アジア学術総合研究所 共同研究プロジェクト・SRF共催シンポジウムの開催について(本学・六月二二日・二三日)
- ③ その他
- ① 東アジア学術総合研究所 兼担所員(共同研究プロジェクト研究代表者)の選考について(継続)
- ② 東アジア学術総合研究所 認証評価に向けた自己点検・評価の実施について
- ③ 東アジア学術総合研究所 二松学舎大学学術叢書『幽霊の歴史文化学』の増刷について
- ④ その他

第四回

日時 七月一日(木) 一五時一〇分
場所 役員会議室

- ① 東アジア学術総合研究所 中国文化大学東亜人文社会科学研究院との交流に関する合意書締結について
- ② 日本漢学研究センター 山東大学国際漢学研究センターからの目録編纂等に係る協力依頼について
- ③ 東アジア学術総合研究所 認証評価に向けた自己点検・評価の実施について(継続)
- ④ 東アジア学術総合研究所 公開シンポジウムの開催について(興福寺会館(奈良)・

第五回

日時 一〇月一六日(水) 一二時三〇分
場所 役員会議室

- ⑤ 八月一七日) その他
- ① 東アジア学術総合研究所 二〇二〇年度特別事業費申請について
- ② 陽明学研究センター 国際学術シンポジウム「陽明学と東アジア文化」の開催について
- ③ その他

第六回

日時 十一月二〇日(水) 一二時三五分
場所 役員会議室

- ① 東アジア学術総合研究所 客員研究員の受入について
- ② 東アジア学術総合研究所 二〇二〇年度特別事業費の追加申請について
- ③ 東アジア学術総合研究所 規程等の改正・制定について
- ④ その他

第七回

日時 十二月一日(水) 一二時三〇分
場所 八〇八演習室

- ① 東アジア学術総合研究所 海外協定校との共同研究センターの名称について
- ② 東アジア学術総合研究所 研究員に関する内規の改正について(継続)
- ③ 陽明学研究センター・日本漢学研究セン

第八回

- 日時 二月二六日(水) 一五時
場所 教授会会議室
- 議題 ① 東アジア学術総合研究所 陽明学研究センター長・日本漢学研究センター長の任期延長について
② 陽明学研究センター・日本漢学研究センター 助手の選考について
③ 東アジア学術総合研究所『東アジア学術総合研究所集刊』第五〇集について
④ 陽明学研究センター『陽明学』第三〇号について
⑤ 日本漢学研究センター『日本漢文学研究』第一五号について
⑥ その他

3. 陽明学研究センター運営連絡会

第一回

- 日時 四月一〇日(水) 一二時三五分
場所 八〇六演習室
- 議題 ① 構成員および事業概要について

- ② 宋明資料輪読会について
③ 『陽明学』第三〇号の原稿募集について
④ その他

4. 日本漢学研究センター運営連絡会

第一回

- 日時 四月一七日(水) 一二時三〇分
場所 教授会会議室
- 議題 ① 構成員について
② 事業概要について
③ 『日本漢文学研究』第一五号の原稿募集について
④ その他

5. 『日本漢文学研究』編集委員会

第一回

- 日時 一〇月二三日(水) 一五時三〇分
場所 役員会議室
- 議題 ① 査読について
② 編集について
③ 経費について
④ その他

6. 海外講座の実施

- 海外漢文講座 ※動画配信による講義

対象 イタリア カ・フォスカリ大学

期間 二〇一九年二月六日(水)～五月二四日(火)

講師 牧角悦子教授・町泉寿郎教授・清水信子講
師・川邊雄大講師

コマ数 一五回(一コマ九〇分)
受講生 一五名

※ 最終回の五月一四日(火)は、牧角悦子教授・町
泉寿郎教授を講師として現地に派遣し、集中講義
を実施した。

7. 日本漢学研究センター 公開講座の開講

演習講座

①講座名 古文書解読講座

講師 文学部教授 町 泉寿郎

曜日等 火曜日 四時限

②講座名 『古事談』の研究

講師 文学部教授 磯 水絵

曜日等 火曜日 六時限

③講座名 『国語』の研究

講師 文学部教授 小方 伴子

曜日等 月曜日 五時限

④講座名 論文撰述の方法と実践

講師 文学部教授 王 宝平

曜日等 水曜日 六時限

8. シンポジウムの開催

①東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト・S
RF共催シンポジウム

日時 六月二二日(土) 一三時～一七時三〇分
二三日(日) 一〇時～一五時三〇分

会場 二松学舎大学九段キャンパス四号館六階
四〇六一教室

テーマ 21世紀における『孟子』像の新展開
【第一日目】「中国古典学と孟子」

開会挨拶 二松学舎大学文学部長・共同研究プロジェ
クト研究分担者 牧角 悦子

趣旨説明 二松学舎大学教授・共同研究プロジェクト
研究代表者 田中 正樹

報告一 「五行から四端へ―孟子による子思思想の
受容と改変―」 広島大学教授 末永 高
康

報告二 「太初改暦における黄老と儒学の統一
―孟子の「五百年周期説」の漢代的展開―」
山口大学准教授 南部 英彦

報告三 「『孟子』の北宋を読み解く」
二松学舎大学特別招聘教授・共同研究プ
ロジェクト研究分担者 市来 津由彦

報告四 「イエズス会士によるヨーロッパへの初期
『孟子』紹介と翻訳の実情」
筑波大学教授 井川 義次

報告五 「伊藤仁斎と『孟子』」
東海大学教授 田尻 祐一郎

総合討論 コメンテーター
広島大学名誉教授 野間 文史

【第二日目】「近代漢学と孟子」

開会挨拶 二松学舎大学文学部長・SRF学術研究室

主任 牧角 悦子

趣旨説明 二松学舎大学教授・SRF研究代表者

町 泉寿郎

報告一 「孟子の幕末」

金城学院大学教授 桐原 健真

報告二 「山田方谷・三島中洲にみる近代の陽明学
と孟子」

二松学舎大学教授・SRF事業推進担当者 田中 正樹

報告三 「中江兆民における孟子とフランス共和主
義の哲学」

ボルドー・モンテニユ大学准教授 エディ・デュフルモン

報告四 「フランスシノロジーが読む孟子」

東京大学教授 中島 隆博

報告五 「明治大正期の『孟子』教材」

大妻女子大学非常勤講師 木村 淳

総合討論 コメンテーター SRF研究員 ジェレミー・ウッド

②東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト公開
シンポジウム

日 時 八月一七日(土) 一三時～一六時

会 場 奈良・興福寺会館

テーム 興福寺に鳴り響いた音楽 教訓抄の世界

発表一 「信仰と音楽」

二松学舎大学教授・共同研究プロジェクト
研究代表者

発表二 「音楽の湧水地 興福寺」

磯 水絵

上野学園大学日本音楽史研究所講師

櫻井 利佳

発表三 「狛近真の生涯」

二松学舎大学非常勤講師 神田 邦彦

発表四 「狛氏と伎楽の笛」

法政大学大学院博士後期課程 根本 千聡

発表五 「南都寺院の伎楽曲の「再生」に向けて」

法政大学教授 ステイブ・G・ネルソン

③二松学舎大学・浙江工商大学・浙江省倫理学会共催
学術シンポジウム第四回「陽明学と浙江文化―東ア
ジアにおける陽明学」

日 時 一月三日(日) 九時～一七時三〇分

会 場 浙江文華大酒店六階「流星庁」

開会挨拶 浙江工商大学学長・浙江省倫理学会会長

陳 壽燦

浙江省社科聯科研管理処処長 胡 曉立

二松学舎大学学長 江藤 茂博

【第一セクション】

「文武合一」から「心刀合一」へ―日本武士文化の再
考―

浙江社会科学院研究員 銭 明

「左派王学の経世済民の思想 ―王良と李贄を中心と
して―」

北海道大学名誉教授 佐藤 鍊太郎

【第二セクション】

「王畿『中鑑録』に関する一考察」

早稲田大学教授 永富 青地

「近代陽明学の側面 ―山田方谷の場合―」

二松学舎大学教授 田中 正樹

「心」より始まり、「良知」に従って前に進む ―私
と私の企業―

紹興市温州商会常務副会長 林 作河

【第三セクション】

「王陽明の陸九淵心学に対する止揚と超越について」

寧波大学教授 何 静

「陽明学研究の未来性——哲学的新展開」

中国社会科学学院哲学研究所研究員 匡 鈞

「幕末陽明学者吉村秋陽と明末の思潮——『大学贖議』を中心として」

台湾清華大学人文社会学院副教授 鍋島 亜朱華

「熊澤蕃山の心学思想について——陽明心学との比較」

浙江工商大学東方語言文化学院講師 関 雅泉

「王畿の経世論と経史説——『歴代史纂左編凡例并引』を例に——」

二松学舎大学陽明学研究センター助手 山路 裕

討論

閉会挨拶 浙江省国際陽明学研究センター

秘書室室長 張 宏敏

学校法人二松学舎常任理事 五十嵐 清

④東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクトシンポジウム

日 時 一月八日(水) 一三時～一六時三〇分

会 場 二松学舎大学九段キャンパス一号館二階

二〇二教室

テーマ 越境する現代日本文化 東アジアにおける

コンテンツの受容

開会挨拶 二松学舎大学文学部長・共同研究プロジェクト

研究分担者 松本 健太郎

趣旨説明 二松学舎大学教授・共同研究プロジェクト

研究分担者 松本 健太郎

基調講演 「中国で日本の漫画やアニメはどう受容されて

いるのか」

中国伝媒大学教授 範 周

シンポジウム

「日中のトランスナショナルコミュニケーション」

司会・パネリスト

二松学舎大学専任講師 谷島 貫太

パネリスト 二松学舎大学教授・共同研究プロジェクト

ト研究分担者 王 宝平

パネリスト 法政大学教授 須藤 廣

パネリスト

9. 東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト

共同研究①

研究代表者

文学部教授 田中 正樹

研究課題 中国古典学の再構築

研究期間 三年(本年度は三年目)

実施内容

研究分担者の成果として、中国思想分野の市来

津由彦教授は、学術論文として「日本における中

国思想——儒教文化を中心に」(牧角悦子・町泉寿郎編

『漢学という視座 講座近代日本と漢学第一巻』戎

光祥出版、二〇一九年一二月)があり、学会発表

原稿として「如何解釈朱子学」格物、説之、理

——以荒木見悟《新版 仏教与儒教》为中心(陳曉

傑中国語訳)(会議論文集『中国哲学的豊富性再現

——荒木見悟与中日儒学国際研討会』復旦大学哲学

学院 復旦大学上海儒学院、二〇一九年九月)があ

る。また、訳注として『朱子語類』卷九十五「程

子之書 一」訳注稿(五)」「(『東洋古典学研究』第

四八集、東洋古典学研究會(広島大学)、二〇一九

年一〇月)及び「同(四)」「(『東洋古典学研究』第

四七集、二〇一九年五月)がある。

中国文学分野の牧角悦子教授は、学術論文として「経学と文学―詩経研究を例として―」(『学際化する中国学―第十回日中学者中国古代理論壇論文集』、汲古書院、二〇一九年六月)、「ヤマトノオロチと九尾のキツネ―日中古代神話学序説」(『日本漢文学の射程―その方法、達成と可能性』、汲古書院、二〇一九年七月)、「曹操と楽府(二)―歌以言志―歌以詠志」の意味するもの―(狩野直禎先生追悼『三國志論集』、汲古書院、二〇一九年九月)、「日本漢文学―その定義と概論」(講座近代日本と漢学・第一巻『漢学という視座』、戎光祥出版、二〇一九年一二月)、「中国近代の尊厳概念―魯迅の小説を通して」(『尊厳と社会』、法政大学、二〇二〇年三月)がある。

同じく中国文学分野(小説)の伊藤晋太郎教授には、学術論文として「洪邁と関帝信仰―『容齋四筆』巻八「寿亭侯印」を手がかりに―」(『三國志論集』、汲古書院、二〇一九年九月)、書評として「『三國志演義』から中国人を読み解く画期的な総合事典」(『漢文研究』、大修館書店、二〇一九年四月)、論説として「関羽の知られざる物語―「関帝聖蹟図」を読む」(『ユリイカ』六月号、青土社、二〇一九年六月)、解説として「慶応義塾」(『漢学と漢学塾』(講座近代日本と漢学 第二巻)、戎光祥出版、二〇二〇年二月)、目録として「二〇一八年日本『三國文化』研究論著目録」(『内江師範学院学報』三四卷一―号、二〇一九年一月)の業績があり、また翻訳として梁満倉著「軍師中郎将諸葛亮の荊州時代」(共訳)(『狩野直禎先生追悼 三國志論集』、汲古書院、二〇一九年九月)がある。

中国史担当の小方伴子教授には、学術論文「清儒の校勘作業における情報継承の一形態―陳奐『國語』校本と汪遠孫『國語明道本攷異』―」(『二松』三四集、二〇二〇年三月)、及び「漢文と中国語」(『講座近代日本と漢学』第七巻『漢学と日本語』、戎光祥出版、二〇二〇年三月)がある。

中国思想担当の田中はシンポジウム等の報告として、「山田方谷・三島中洲にみる近代の陽明学と孟子―『孟子養氣章或問圖解』の圖を中心に―」(二松学舎大学SRF・東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト共催・国際ワークショップ「近代漢学と孟子」(21世紀における『孟子』像の新展開)二日目)二〇一九年六月二三日)、「レオン・ド・ロニー旧蔵漢籍の書入れについて」(二松学舎大学人文学会・SRF共催講演会・シンポジウム「レオン・ド・ロニーと19世紀欧州東洋学」二〇一九年七月一四日)、及び「近代陽明学の一面―山田方谷の場合―」(第四回「陽明学と浙江文化―東アジアにおける陽明学―国際学術シンポジウム二〇一九年一月三日、於杭州・浙江文華ホテル)があり、一〇月二七日に大塚先儒墓所で行われた先儒祭に於て墓前講話「三島中洲先生の生涯と学術」を行った。

共同研究②

研究代表者 文学部教授 江藤 茂博

研究課題 東アジア都市文化における「コンテント」と「モノ」の流通をめぐる学際的研究

研究期間 二年(本年度は二年目)
実施内容

報告一 「越境する現代日本文化 東アジアにおけるコンテンツの受容」

東アジアの隣国である日本と中国は、古の時代から様々なかたちで相互に文化的な交流を重ね、いまに至っている。現在において中国は、日本にとって最も重要な貿易相手国であり、インバウンド訪日外国人数においても外国人留学生数においても、一位を占めている。二〇〇〇年代に入っても、ヒト、モノ、カネ、イメージ、情報の「トランスナショナル」な移動が加速したことにより、日中両国の文化交流は新たな局面を迎えつつあるといえるだろう。いまでは中国の若者は、「Bilibili」のような動画共有サイトを活用して日本の映画やアニメなどのコンテンツへと容易にアクセスしている。逆に日本の若者は、「Tencent」や「荒野行動」のような中国発のソーシャルメディアやソーシャルゲームに夢中である。現代において、インターネットを介した各種のサービスやコンテンツが越境的に流通し、そしてそれをもとにした、日中間の新たなコミュニケーションや文化が台頭しつつあるのである。本イベントでは、コミュニケーションやメディアに関する中国の大学として有名な中国伝媒大学の範周教授をお招きし、「中国における日本の漫画やアニメの受容」との題目でご講演いただいた。そのうえで、法政大学の須藤廣教授、本学の王宝平教授、谷高貫太専任講師をまじえてシンポジウムを開催し、日本と中国におけるコンテンツ文化のトランスナショナルな越境について多角的に討議した。（開催日・会場 二〇二〇年一月八日（水）二松学舎大学九段キャンパス一号館二〇二教室）

報告二 三国時代開幕一八〇〇周年記念シンポジウム「三国志ワールドの展開 中国から日本へ、過去から現在へ」

※予定していたシンポジウムだが、コロナウイルスの世界的な広がりにより中止とした。以下の内容を準備していた。

歴史としての三国時代の終焉以降、様々なジャンルにおいて「三国志」を題材とした作品が作られ続けた。そしてそれらは一四世紀に小説『三国志演義』としていったん集大成された後、今度は『三国志演義』を題材としてまた新たな作品が様々なジャンルにおいて作られていくことになる。その世界の広がりや中国国内にとどまらない。特に日本においては漫画・アニメ・ゲームなどポピュラーチャームの分野において大きな発展を見せる。

東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト「東アジア都市文化における「コンテンツ」と「モノ」の流通をめぐる学際的研究」の一環として開催する本シンポジウムは、三国時代の歴史そのものや『三国志演義』といった文学の内容など三国志を正面から扱うものではなく、三国志を「コンテンツ」とみなし、コンテンツとしての三国志が中国と日本、近代以前と近現代においてどのように展開し、流通し、受容されているかを見たいき、その背景を考える試みである。

共同研究③

研究代表者 文学部教授 磯 水絵

研究課題 興福寺の音楽―狛近真が『教訓抄』を編纂した背景を探る―

研究期間 二年（本年度は一年目）

実施内容

伯近真が編纂した楽書『教訓抄』の研究は、二〇〇五年、本学COE中世漢文班の活動以来、継続的に続けられてきた。本プロジェクトは、その活動の総括的な意味合いをもち、且つは一旦の終結も意味する。

そこで、研究代表・磯は、本学中洲記念講堂で開催された「令和元年度夏季全国大学国語国文学会」第一一九回大会―六月二九日(土)―の講演(統一テーマ「日本を紡ぐ歌謡」)に於いて、「詩歌と舞楽」と題するそれを行った。内容は、古代の舞楽には、当初、うたう部分が存在し、それは通常中国語で唱えられていたらしいという、現行舞楽と古代のその大きな相違を指摘するもので、多くの記録、楽書等の記載を渉猟してのものであった。そうした折に規範となるのが『教訓抄』である。

また、八月八日(木)には、能楽学会・世阿弥セミナー「芸能空間としての興福寺」の講演講師として、奈良・興福寺会館に招かれ、「伯氏幻想―南山城の古代―」と題して、『教訓抄』の誕生した土壌について啓蒙的な解説を行った。

本プロジェクトの今年の中心的なテーマは、明治の廃仏毀釈によって見る影を失い、春日大社にすっかりお株を奪われた状態にある興福寺、そして伯氏が、実はかつて古代音楽の中心に存在していたということ、興福寺はもとより、まず、地元・奈良周辺の人々に認識して頂くことにもあったから、年度当初から奈良の日本音楽研究者を誘って、興福寺内に興福寺年中行事研究会を立ち上げ、音楽と不即不離にある興福寺の行事研究を開

始し、そのこと連動して、八月一七日(土)、既報のように、「興福寺に鳴り響いた音楽―『教訓抄』の世界―」という公開シンポジウムを、奈良・興福寺会館に開催した。その前の週に世阿弥セミナーがあったことも手伝って、多くの参加者があり、興福寺と音楽の深い関係が、周辺の人々に理解されたおむきであり、報道関係者にも注目されつつある(なお、この時のシンポジウムの内容を中心に、次年度には論文集の刊行を計画している)。

現在は、この興奮が冷めない内にということもあって、来年度初め、四月八日の仏生会に、『教訓抄』中に記録されている興福寺の伎楽を再興、奉納する計画を進めている。文学と音楽の研究に留まらず、彼の地の文化の振興にも寄与したいと考えている。

共同研究④

研究代表者 文学部教授 原 由来恵

研究課題 文学におけるメタファーとしての

「虎」の様式

研究期間 一年

実施内容

本共同研究プロジェクトの母体となる研究活動は、二〇一六年七月に始まる。日本文化史の基底となる奈良文化圏を中心に文学という視点から、世界における日本文化の位置づけを再考することを最終目標に本共同プロジェクトメンバーを中心に研究活動が開始された。

二〇一九年度本研究共同プロジェクトは、日本には存在しなかった「虎」に着目し、日本文化に享受された様相を、各時代の文学作品に登場する

「虎」の表現から解析することを

① 古典文学作品に登場する「虎」の用例集積と解析

② 上記①の分析

③ 文学における「虎」と関わる祭祀・藝能・美術の表象資料の集積

④ 「虎」表象における国内外伝播経路の集積を中心を試みてきた。右記①②は七月一日・九月二日～二三日に行った四回の研究会において分析をまとめるとともに、webを活用してデータ共有と更新を行ってきた。③については研究会で着目した、宮廷儀礼及び年中行事に関わる京都の祭祀を中心とした資料収集と調査、また生活文化への表象用例の調査と資料収集を行った。④に関しては文化流入に関わる資料調査として、インド・中国・韓国を中心に行った。また日本における伝播例については民間伝承芸能の事例集積を行うとともに、浦賀「虎踊り」については九月一七・一八日横須賀市教育委員会、一一月一四・一五日浦賀虎踊り保存会の協力のもと、聞き書き調査並びに伝播資料の収集を行った。

これまでの結果から文学に登場する「虎」への仮託過程の様相には、東アジア文化圏からの仏教・陰陽道といった思想とともに、それらに纏わる美術・芸術・祭祀の流入からの表象。そして日本文化において時代における政治・権力・民間信仰が加わり変遷を辿ることで、日本の表現のメタファーが確立していくことが見受けられた。主に中世後期以降の「虎」の様式変化は日本の独自性が強く見られた。

これらの結果は三月の公開研究会で提示し論集

刊行等で公表していく予定である。

追記

*二〇二〇年二月二〇日現在、新型コロナウイルス感染症拡大の状況から国外からの参加者を断念するとともに、公開研究会の開催も未定となった。ここまでの研究成果は論文集の刊行などで示していくこととする。